コンテンポラリーダンス作品における
ポスト身体化と民俗芸能の考察

(A Study of Post Embodiment and Folk Performances in Contemporary Dance)

浅井　信好　*ASAI Nobuyoshi*

（芸術学部舞台芸術領域）

要旨　この研究紀要は、コンテンポラリーダンス作品におけるポスト身体化と民俗芸能の相互作用に焦点を当て、身体性と文化の結びつきを探求する。研究の背景と目的、研究成果、今後の展望について説明する。

キーワード　DX　ポスト身体化　コンテンポラリーダンス　土着的身体性

1.　研究の背景

同時代を表現すると言われるコンテンポラリーダンスは、常に社会情勢や環境の変化に影響されながら、多様な表現手法が振付家によって開発されてきた。近年では、ウィズコロナからポストコロナにかけて、デジタルトランスフォーメーション（DX）の進化に伴い、振付家の表現手法だけでなく、観客の鑑賞形態においても大きな変化が見られる。

稲見昌彦は、農業革命時には健康な身体が生産材として重要な役割を果たしていたが、産業革命によって工業化と情報化が進展し、運動能力が低くても生産性がある状態が生まれ、身体の能力とは無関係に生産が行われる状態を「脱身体」として主張している 1)。今後、DX の発展に伴い、身体のさまざまな可能性が拡大し、急速に「ポスト身体化」の時代へと変化していくと考えられる。

1.2　研究の目的

今後、DX の発展によって、デジタル化が加速する社会環境の中で、演じる側のダンサー、鑑賞する側の観客も身体に対する価値基準が減少していくことを危惧したため、根源的な身体の価値を再提示することを目的としている。そのために、日本各地の農耕儀礼、考古学、民俗信仰、神楽などのフィールドワーク実施を通じて、日本文化の水脈を掘り下げていくことで、「土着的身体性」をテーマにしたコンテンポラリーダンス作品を創作した。

2.　研究方法

この研究は、文献調査、フィールドワーク、アンケート調査、作品発表を組み合わせて実施された。文献調査では、コンテンポラリーダンス、民俗芸能、デジタルトランスフォーメーションに関する関連文献を収集し、分析した。フィールドワークでは、愛知県名古屋市中川区の「西宮神社」を調査し、地域の民話や民俗信仰について情報を収集した。長野県諏訪地方の「諏訪大社」、「御頭御社宮司総社」、「神長官守矢史料館」、「御頭祭」、「茅野市尖石縄文考古館」を調査し、ミシャグジ信仰についての情報を収集した。アンケート調査は、愛知公演の来場者 228 名のアンケート集計結果をもとに、観客の評価と意見を収集した。

2.2　地域の伝承を調査

【西宮神社の拝殿】

私が創作拠点とする愛知県名古屋市中川区にある氏神である《西宮神社》の調査を行った。「西宮神社」は明治末期の神社合祀の際、当時の社格制度において無格社とされていたため、近隣の神社に合祀された。その後、中川運河開通を機に運河総鎮守 金刀比羅社として名称が変更された。しかし、現在もなお、地域住民や氏子の方々からは金刀比羅社ではなく、「西宮神社」または、「おしゃもじさま」の名称で親しまれている。

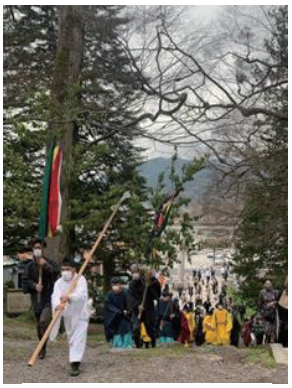
「西宮神社」では、祭神として天照大御神之荒魂（アマテラスオオミカミノアラタマ）が祀られていると考えられているが、拝殿に大きなしゃもじが奉納されており、「おしゃもじさま」と呼ばれ、地域からは疫神様として祀られている。地域に伝わる民話に登場する社宮司社のお社がある塚を「おしゃごじ」と土地の人々は呼んでいることから、「おしゃもじさま」と「おしゃごじ」には何らかの関係性を持っているのではないかと考え、西宮神社の調査を行なっている愛知大学三遠南信地域連携研究センターの内山志保助教を訪ねたところ、民俗学者柳田国男が「石神問答（いしがみもんどう）」（全集、第十二巻）の中で最も不思議な信仰として取り上げていた長野県諏訪地方を中心に分布する「ミシャグジ」という信仰形態との繋がりの可能性が示唆された。

2.3　ミシャグジ信仰形態を調査

【御頭御社宮司総社

【神長官守矢史料館】

今井野菊は、ミシャグジ神の分布調査を長野県、山梨県はもとより、関東から関西まで2,300か所を歩いて行い、様々な発音の変化をとげて散在しているミシャグジ神を探しだし、ミシャグジ信仰圏を明らかにした。呼び方も〈ミシャグジ〉の敬称の〈ミ〉が〈オ〉、〈シャ〉が〈サ〉、〈グ〉が〈ク〉あるいは〈コ〉〈ゴ〉と複雑にからみあって変化し、多様な音転呼称があり、西宮神社にまつわる「おしゃもじさま」「おしゃごじ」という呼び名についても、関連性を指摘している 2)。



【御頭祭】

諏訪地方には過去、土着の洩矢民族が住んでいたと言われている。この洩矢民族が信仰していたのが「ミシャグジ神」と呼ばれる巨石や巨木に降りてくる自然神だった。洩矢民族は、この地で狩猟、焼畑などの原始狩猟を中心に生活をし、縄文期の最盛の時に生息していた

といわれている。諏訪地方での調査研究では、考古学、祭祀、儀礼を中心にフィールドワークを実施し、稲作文化以前の生活形態を調査することで当時、人々が生活を営む上でどのような身体性を用いていたのかを調査した。

2.4　土偶を調査

【茅野市尖石縄文考古館】

「縄文のビーナス」や「仮面の女神」といった諏訪地方で発見された土偶は、下半身を太く短く造られているものが多く出土している。理由は、「祟り鎮め」のために「四股」のポーズに似た土偶を作ることで、大地を踏み固める呪術的な意味合いを持っていたと考えられている。陰陽道においても、足拍子で大地を踏む反閇が悪霊を払い、相撲の四股の原型となり、土地や土地の精霊に対して豊穣を祈る意味があることが考えられている。

日本では、文化の発展過程で、「踏む」という大地との親和性のある動作が強く信仰や生活に影響を与え、芸能に昇華されてきた。一方、西洋の踊りは軽快さや重力から解き放される動きを重視し、中央・西アジアの伝統的な踊りを見ても、日本ほど深く踏み込む踊りや祭りを持つ国はあまり多くはない。

日本の伝統芸能を構成する要素の中で、「踏む」と同様に重要な役割を果たす「静寂」がある。日本の伝統芸能では、他国の伝統芸能に比べて圧倒的に長い時間が静寂に費やされている。

今回のフィールドワークと調査を通じて、これらの要素が日本の踊りの根源的な特徴として浮かび上がり、これらを作品制作の背景とし、舞台美術と振付の制作を実施した。

3.　舞台美術リサーチ

【土を使った振付リサーチ】

【土を皮膚に貼り付けるリサーチ】

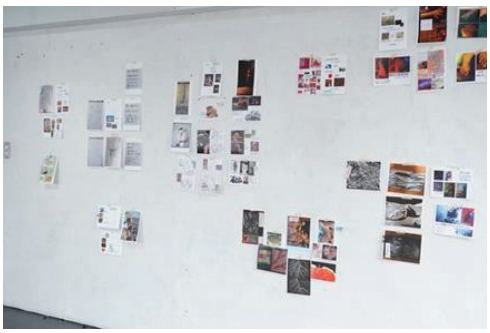
【土を踏み締めることで表面の質感の変化をリサーチ】

【霧を使用した雨乞いシーンのリサーチ】

【照明によって衣装の色調の変化をリサーチ】

【名古屋芸術大学舞台芸術領域の学生と京都芸術大学 ULTRA_SANDWICH #18 の学生の提案に対して、フィードバックを行う浅井信好と名和晃平】

【彫刻と振付の境界線を探るために彫刻をモチーフにした振付やポージングの提案】



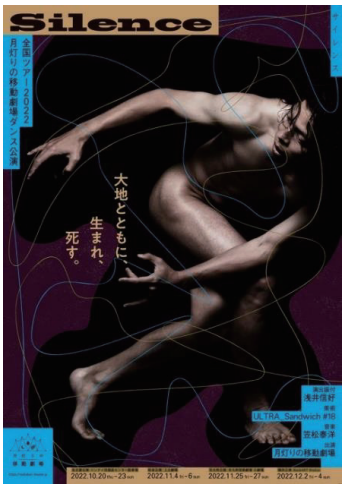
【学生のリサーチ内容を分類分けして調査】

【出演者の顔をデジタルスキャンし、さまざまな形状にデザインしたお面を装着】

フィールドワークでのリサーチをもとに、「骸」「幼体」「神楽」「生贄」「磐座」「田楽」「農耕儀礼」「雨乞い」という振付シーンを構成した。京都芸術大学 ULTRA_SANDWICH #18 と名古屋芸術大学舞台芸術領域舞台美術コースの学生が共同で舞台美術に使用する土や砂の素材についてのリサーチ、彫刻的な振付のリサーチ、お面のデザインについて 2 回にわたって、リサーチを実施した。

4.　公演情報　（出演者・スタッフ）

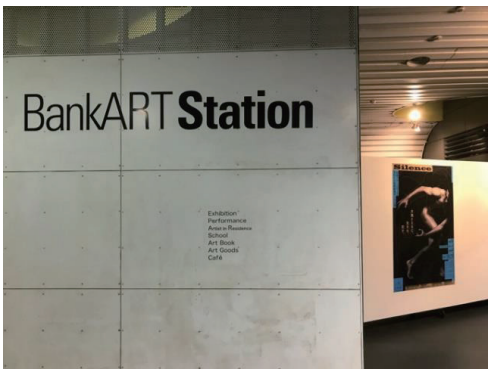
本作では、10 代から 70 代までの多様な年齢層の舞踏家、ダンサー、マイム俳優、傀儡子が出演し、彫刻家の名和晃平率いる ULTRA_Sandwich #18 が美術を担当し、作曲は笠松泰洋が担当した。



【公演チラシ】

演出：浅井 信好
振付：浅井 信好
出演：浅井 信好、奥野 衆英、杉浦 ゆら、副島 日毬、
　　鈴木 大翔、河西 進、A2C
美術：ULTRA_SANDWICH #18
音楽：笠松 泰洋
衣装：梅谷 摩耶
舞台監督：山下 翼
照明：福井 孝子
音響：伊藤 隆文
映像：佐藤 良祐
写真：大洞 博靖、夢画、杉 和博
宣伝美術：大島 慶一郎
企画制作：月灯りの移動劇場
主催：月灯りの移動劇場
協力：北九州芸術劇場、ダンスハウス黄金 4422、リンナイ株式会社
後援：名古屋芸術大学
助成：中川運河助成 ARToC10、Arts for the future!2、愛知県文化活動費補助金

4.2　公演情報（動員人数 ・実施会場）



【BankART Station での様子】

事業 1：2022 年 10 月 20 日～10 月 23 日
（4 公演/282 人動員）
事業 2：2022 年 11 月 4 日～11 月 6 日
（3 公演/66 人動員）
事業 3：2022 年 11 月 8 日～11 月 9 日
（3 公演/242 人動員）
事業 4：2022 年 11 月 25 日～11 月 27 日
（3 公演/88 人動員）
事業 5：2022 年 12 月 2 日～12 月 4 日
（３公演/247 人動員）
事業 6：2022 年 12 月 11 日
（１公演・180 人動員）　　動員数：1,005 人

事業1：リンナイ旧部品センター駐車場（名古屋）
事業2：上土劇場（松本）
事業3：嵐山芸術祭法輪寺（京都）
事業4：北九州芸術劇場小劇場（北九州）
事業5：BankART Station（横浜）
事業6：WITH HARAJUKU FESTIVAL（東京）

5.　公演写真

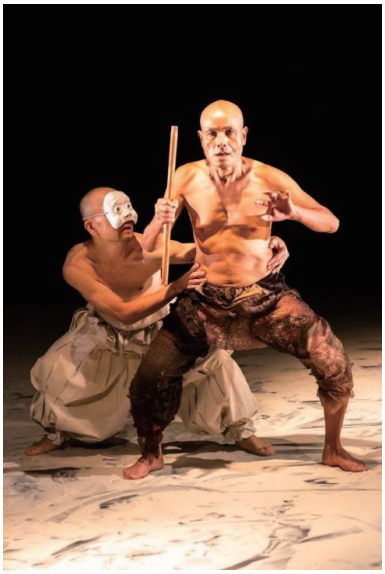
【公演シーン：骸】

【公演シーン：生贄】

【公演シーン：神楽】

【公演シーン：幼体】

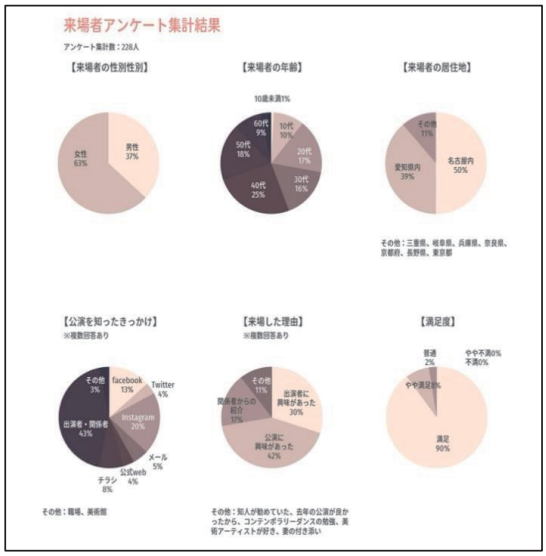
【公演シーン：磐座】



【公演シーン：田楽】

【公演シーン：雨乞い】

6.　アンケート集計



【愛知公演におけるアンケート集計】

愛知公演の来場者 228 人からアンケートを回収し、観客の属性だけでなく、自由記述の感想をもとに、本作品を通じて観客がどのような感想を持ったのかを調査した。

【観客の感想】
・砂の効果が面白かった。
・身体の対比が面白かった。
・構成が良かった。
・身体にフォーカスが集約されていた演出が素晴らしかった。
・今までに見たことがない表現だった。新鮮だった。
・死、天狗、神、ただただ生命体。人間ではないものをたくさん見た。
・それぞれの身体の存在感と内なるのもを感じた。
・名古屋でレベルの高い作品が観られて驚いた。
・表情・息遣いまで感じ、感動した。
・緊張して観た。
・肉体の美しさを感じた。
・衣装が素晴らしかった。
・老・若・男・女の組み合わせが良かった。
・身体の扱いによって、ここまで表現ができるのかと驚いた。
・神話のようだった。
・可視化された時間の流れと肉体が美しかった。
・高次元な舞台を名古屋でこのフィーで観られて幸せ。
・根源的なものを感じられて良かった。
・気持ち悪くて最高だった。感想は言葉では言えない。
・会場・キャストとても良かった。
・骸骨がかわいかった。
・腰を落として力強く踊るのがかっこいい。
・舞台美術が素敵。砂の後も美しかった。
・大変刺激的で美しく、野外ならではの感覚が作品と相まって面白く素晴らしかった。

・地面を踏む力強さに「生きる」実感が伝わってきた。
・初めてこのような公演を鑑賞した。今まで触れてこなかった世界観でとても素敵だった。
・光の影も音も指先まで素晴らしく、観ている私の足も大地と一つになった感じがした。
・身体の動き・ライン・震え、全てが日常にはない神秘的なものだった。
・砂と肌が擦れる音も染み渡る心地よさを感じた。
・衝撃を受けた。
・様々な生命を思わせる動きのバリエーションが豊かで、特に植物的な動きが印象的でした。
・お祭りみたいな音楽が面白かった。
・やや内容が難しかったが、面白かった。
・見たことがない人間の体勢が色々想像させられて面白かった。
・舞台美術・照明・音響も素晴らしかった。
・今回の作品は「重さ」「重力感」がすごかった。
・とても好きな作品だった。
・久しぶりに肉体そのものを見る・感じる作品だった。生命力・身体の美しさを感じた。
・ものの質感やその場の空気、その場にある全てのものの根本的な関係性を大切にされており、いつも癒される。貴重かつ大切な時間をありがとう。

7.　研究成果

３会場の野外公演、３会場の屋内公演のアンケート回答を比較した結果、屋外公演の方が環境と作品の相互作用についての記述が多く、観客は作品を空間的・時間的に捉えている傾向が見受けられた。屋内公演の方は振付におけるフォルム、ダンサーの身体強度、衣装や美術素材などに興味を持つ傾向が見受けられた。一貫して多く回答されるものとして、大地を踏むという行為を通して、「大地との親和性」「神話的」「農耕儀礼」などの意見が多数見受けられた。

7.2　今後の展望

2024年1月に一般社団法人EPADの舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業にて、愛知県奥三河地方で鎌倉時代末期から室町時代にかけて、山伏などの修験者たちによって伝えられたと言われる「花祭」を題材に1年間をかけて文献調査及び、フィールドワーク、月地区花祭保存会から直接、舞や演奏の指導を受け、「花祭」への参加を通じて、リサーチを行なったのち、ドキュメンタリー映像の制作を行った。稲作農耕文化以降に形成された農耕祭祀である「花祭」を通じて、踏むという行為を掘り下げ、今後も文化・風土・芸能の繋がりをドキュメンタリー映像作品制作によって探求していく。

注・引用文献

１）稲見 昌彦（2020年）『デジタル時代の身体～ポスト身体社会論～』
(https://www.nttdata.com/jp/ja/data-insight/2020/1218/、2021年1月10日)
２）古部族研究会(2017年)『古代諏訪とミシャグジ祭政体の研究』人間社文庫，p.81

参考文献

戸矢 学(2014年)『諏訪の神 封印された縄文の血祭り』河出書房新社
クロード・レヴィ＝ストロース　川田順造 訳(2014年)『月の裏側 日本文化への視角』中央公論新社
鷲田 清一(1995年)『ちぐはぐな身体』ちくま文庫
山本 聡美(2018年)『闇の日本美術』筑摩書房

北沢 房子（2020 年）『諏訪の神さま気になる　古文書でひもとく諏訪信仰のはるかな旅』信濃毎日新聞社
鈴木 正崇(2021 年)『女人禁制の人類学』法蔵館
早川 孝太郎(2017 年)『花祭』角川ソフィア文庫
谷川 渥(2009 年)『肉体の迷宮』東京書籍
中沢 新一(2018 年)『精霊の王』講談社学術文庫
小林 達雄(2018 年)『縄文文化が日本の未来を拓く』徳間書店
天児 牛大(2015 年)『重力との対話　記憶の海辺から山海塾の舞踏へ』岩波書店